

## 両手動作の接触及び空間情報の相互性獲得により食事動作の質的变化した症例 - 「普通にごはんが食べたい」という希望を叶える為に-

○大和 志保<sup>1)</sup>

1) 海老名総合病院 リハビリテーション科

### 【はじめに】

両手に痺れがある患者の食事動作に着目し、両手動作の接触及び空間の情報に着目し介入を行った結果、質的变化が得られたので報告する。

### 【症例】

70歳代の右利き女性。中心性頸髄損傷により、不全麻痺と感覚鈍麻、両手の痺れがありNRS右6/10、左4/10。両手での物品操作の拙劣さを認めた。食事は、右手で箸を使用し食物を扱い操作や構えで右肩関節や手指に放散反応や体幹左側屈し代償していた。箸は交差し持ち直しが多かった。左手は腕を扱うと手指の放散反応、道具に合わせた構えは不適切かつ出来ても腕を方向付け出来ず固定される為、上部より押し付けていた。表象から、「箸を持つとお腕が消える」「両手で何かすると片方が消える」と発言。食事のCOPM満足度2/10とQOL低下を認めた。

### 【病態解釈・治療経過】

両手共通して、対象物への構えや操作の際に放散反応は出現する事から接近機能・操作機能に課題があると考えた。要因として、物品を通し対象物の接触情報を知覚し、対象物を3次元に捉えて道具操作や食物移送を行う為の行為の情報空間の規定や複数の空間関係が分からず、非対称性の行為の補足性要素が不足し両手動作が拙劣になったと考える。治療は、両手動作の情報空間を規定する為に体性感覚を使用し両手タブレットにて距離・方向の課題や表面素材の連続性課題を実施。しかし、食事と同様に片側は消去され距離・方向や連続性の識別困難であり、空間課題は誤りが多くみられた。しかし接触課題や接触の空間性では、表面性状や圧の課題は開始時に痺れが手掛かりだったが、徐々に接触面に焦点化し関節運動を知覚した表象へ変化。再度空間課題を行うと、距離・連続性の識別は可能となり、方向課題は両手でのポンテが有効であり空間での腕操作が可能となった。

### 【結果】

接近機能・操作機能が改善し、放散反応や体幹代償はなく、食物を扱う箸は交差なく操作が行え、腕も空間で把持し方向付けや操作が可能となった。表象は「両手の存在感がある」「普通に食べている」と変化。COPM満足度10/10とQOL向上し質的改善が得られたが、NRSは大差なかった。

### 【考察】

本症例を通して、接触及び空間の情報に対する相互性への働きかけが、両手動作の非対称性行為の要素が改善され両手動作の獲得を促進したと考える。

### 【倫理的配慮（説明と同意）】

本症例と家族に対し発表の目的を説明し書面にて同意を得た。